

◆新年のごあいさつ

令和3年 元旦

日本剪画協会 会長 石田良介

新年明けましてお目出度ご御座います。

新しい年を迎え、本年を如何に送り、最も懸案となる剪画展への応募作品は、何をモチーフにして制作するか、楽しみでもあり、多々思案します。

昨年は新型コロナウイルスの影響で、剪画美術展の開催も中止になり、出展者には大変なご迷惑をおかけしました。

しかし、実行委員会のメンバーと事務局、会員、更に、0美術館のご協力により、例年通り本年の6月に、美術展を開催する運びとなりました。

いざ、応募するために、新しい作品を創作するに当たっては、誰でも不安を抱いたり、今年は頑張るぞ！と力んだりします。しかし、この密かなファイトこそが、独創的な作品を生み出す源泉になります。

このエネルギーが、芸術家といわれる多くの達人を、いつまでも若々しく過ごさせているのではないのでしょうか。そして、世の中の動きや、自然の移り変わりを、豊かな感性をもって、深く心で見つめているからです。

まさに心眼を開いて、見詰めているのです。

その心眼を開くきっかけは、対象物から瞬時的に感動を受けて、心に深く刻み込むからです。

感動の根源は、今まで生きて来た中で、悲しかった事、嬉しかった事、美しく感じた事など、心に残っている様々な事象を想起しているのです。

感動なくして作品を制作しても、観て頂く鑑賞者には、感動を与える事はできません。また、剪画協会の会員は、会員同志の話題も常に季節の変化や、花や昆虫、人々の生き様を語り合ったりしています。それは心の中に、対象物への深い興味や関心が潜んでいるからです。

この様に無意識のうちに、様々な物や事象に興味を寄せることこそが、アーティストとしての才能の根幹となります。

日々の暮らしの中で、いろいろと興味を惹くことは、何時迄も若い心で生きる事になると思います。

古来より、絵を描ける才能は、限られた人に、天が与えた贈りものと言われています。剪画協会の会員は、全てその才能が与えられているのです。

しかし、その才能は、命がけで努力しなければ輝いては来ません。

本年もまた、感動を与える作品を創作し、応募しましょう。

会場で、会えることを楽しみにして居ります。



2021年「丑年剪画年賀状展」
金賞受賞作品「赤べこ」
谷島茂則会員